2030 アジェンダ・SDGs を自分事化するためのツールの開発　第 3 報 SDGs グリーンマップ

Development of a tool that facilitates self-inclusion within the 2030 Agenda for Sustainable Development and SDGs 3 - SDGs Green Map

村山　史世
MURAYAMA Fumiyo
麻布大学准教授

［要約］世界共通のアイコンを活用して自分たちで地域の作成するグリーンマップは，1990 年代にニューヨークの環境デザイナーである Wendy Brawer が開発して以来，環境教育やまちづくりの手法として世界 65 か国 1000 以上の地域で作成されてきた。グリーンマップは，地域を観察し，対話をしながら地域の資源や課題を描く手法としては有効である。しかし，作成した後の活用方法に課題があった。

グリーンマップを統括する Green Map System は，2018 年にグリーンマップのアイコンと SDGs のアイコンの対応表を発表した。この対応表を参考に，SDGs とグリーンマップのアイコンで作成する地域の地図が SDGs グリーンマップである。

本研究では，ワークショップの実践を通して開発した SDGs グリーンマップを活用して地域の現在と昔をつなげ，未来の姿を描く手法を紹介する。自分たちの視点から地域を評価し，地域のビジョンとアジェンダを SDGs に関連付けながら共創することができるツールが，SDGs グリーンマップである。

［キーワード］グリーンマップ，マッピング，アジェンダ，SDGs，自分事化

１．はじめに

筆者らはすでに「SDGs おでん」と「SDGs レンズ」を 2030 アジェンダ・SDGs を自分事化するツールとして報告した[1]。本稿は第 3 報として，「SDGs グリーンマップ」の手法と実践を報告する。

ある事象や概念を SDGs の相互関連性・一体性・不可分割性の観点から見る「SDGs レンズ」は，それらと SDGs および自分自身とのつながりを確認することができる。これらのつながりをもとに，将来ビジョンの構想のためのワークシートが「SDGs おでん」である。「SDGs レンズ」と「SDGs おでん」が自分事化するのは，事象や概念と人と SDGs との関係性である。

これに対して SDGs グリーンマップは，地域情報をアイコン，テキスト，イラストや写真で把握することで，空間的に地域の資源や課題を把握し，地域の現在と過去を把握することも，過去と現在をつなげて未来のありたい姿を描くこともできる。すなわち，地域を空間的・時間的に把握し，地域と人と SDGs の関係性を自分事化することができる。

本稿は，まずグリーンマップを紹介する。次に，グリーンマップのアイコンと SDGs アイコンの対応表を活用した SDGs グリーンマップを紹介する。そして，SDGs グリーンマップ・ワークショップの実践を紹介しながら，SDGs グリーンマップの活用方法と可能性について論じる。

2. グリーンマップ[2]

グリーンマップとは，自然や文化，環境に配慮した生活を表す世界共通のアイコンである「グローバルアイコン」を活用して自分たちでつくる地域の環境地図である。環境デザイナーの Wendy Brawer が 1992 年に発表した Green Apple Map of New York City をもとに，グローバルアイコンのデザインとそれらを活用したマッピングの手法を開発した。現在までに世界 65 カ国 1000 以上の地域で作成されている。日本では，1997 年に京都で開催された国連気候変動枠組条約第 3 回締約国会議（COP3）の際に作成された「京都グリーンマップ」が最初のものである。

みんなで地域を探索し，対話をしながら気づきをテキストやイラスト，写真などを使ってマッピングする学習は，学校や社会教育施設,各種イベントでのまちあるきや環境教育,まちづくりなどでもよく行われている。この手法に加えて，グローバルアイコンを使用することがグリーンマップの特徴である。言語の違いを越えたコミュニケーションが可能であり，世界中で作成・発信することも，書かれている地理情報を理解・共有することもできる。現在 169 のグローバルアイコンが設定されている。地域でオリジナルアイコンを作成することもできる。

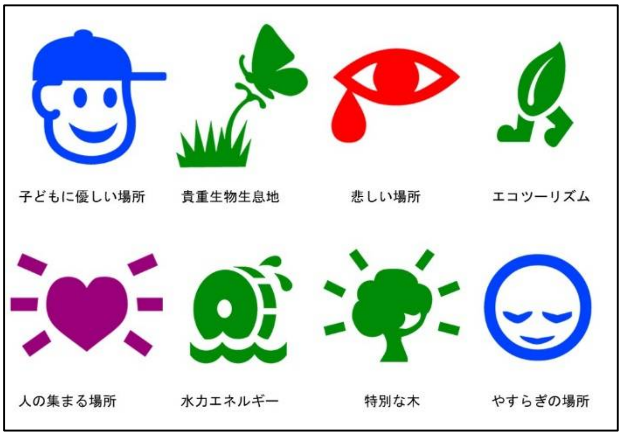

図 1　グローバルアイコンの例

グローバルアイコンは Creative Commons 4.0 BY-NC-SA（表示-非営利-継承）ライセンス[3]で提供されている。クレジットを表示した上で，非営利での使用および加工した部分も元のアイコンと同じライセンスの下で配布するとの条件を満たせば，誰でも自由にグローバルアイコンの利用や再配布ができる。

筆者は学生とともに，2008 年に麻布大学と玉川大学[4]で，2015 年に神奈川県相模原市緑区青根でグリーンマップを作成した。

図 2　あおね里山グリーンマップ

3. SDGs グリーンマップ

2017 年 11 月，Green Map System は，スイスのマップメーカーと協力して SDGs のアイコンとグリーンマップのグローバルアイコンとの対応表を英語版および仏語版[5]で公表した。日本語版も 2019 年に公開されている。

この対応表を活用した SDGs グリーンマップ・ワークショップを，麻布大学の教員と学生たちは，2019 年 10 月 20 日に県立七沢森林公園（神奈川県厚木市）での神奈川県公園協会主催「森の SDGs フェス」の一企画として実施した。

手順は以下のとおりである。①ブースを訪れた来場者に対して SDGs グリーンマップを説明し，希望者は学生とともに公園内を散策する。②発見した資源や課題をアイコンや写真で手持ちの地図に記録する。③ブースに戻り，１枚の大判地図に記録して共有する。この手法は，同じ日に多様な参加者が発見した

地域情報のレイヤーを，1枚の地図の上に重ねてゆく，というものだった。

対応表を活用して SDGs の観点から七沢森林公園の資源と課題を抽出し，来場者の視点で七沢森林公園を評価し，SDGs グリーンマップで可視化する，というプログラムの目的は果たすことができた。

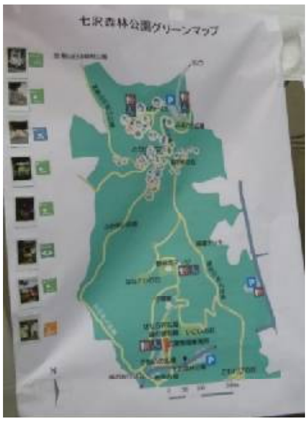

写真 1　七沢森林公園 SDGs グリーンマップ

グリーンマップも SDGs グリーンマップも，探索や地図を作成する時に対話をしながら地域の資源や課題を評価し，地図にまとめてゆく過程の双方向的なコミュニケーションが学びとなる。他方，出来上がった地図は，たとえ世界共通のアイコンを活用していても，マッピングに参加しなかった人たちまでその意義や価値を共有することは難しい。地図をつくること自体が目的ならば，地図の完成で目的は達成したこととなり，その先の発展性はない。グリーンマップを作成したらそれで終わり，というイベントが実際に多い。七沢森林公園の SDGs グリーンマップも作成後の展開はなかった。何のために作成するか，作成した地図を何に活用するか，が課題となる。

この課題の解決を志向して、ワークショップの実践の中から開発した SDGs グリーンマップの活用方法を以下で紹介する。

4. 昔の生活や生業を描く

2019 年 10 月の台風 19 号は，土砂崩れや停電，断水などの甚大な被害を神奈川県相模原市の青根にもたらした。以前から青根で活動していた麻布大学の学生たち[6]は，地元住民との交流で復興を支援した。その際，青根の昔の生活や生業（遊び仕事）を知るために SDGs グリーンマップを活用した。交流会に参加した地元住民に，昔の話を聞きながら地図上にグリーンマップのアイコンを貼ってもらった。

集落には薪炭林や炭焼き窯，多くの水車が存在したことがわかった。後日確認したところ，青根には 34 台の水車が存在した[7]。自然再生エネルギーを生産･消費していた青根も，石油由来のエネルギーが主流になったことで生活も生業も変化し，過疎も進行した。昔に戻ることはできないが，SDGs グリーンマップで昔を知り，これからのあり方を考えることは可能である。自然再生エネルギーの活用は，今後のアジェンダになりうるテーマである[8]。

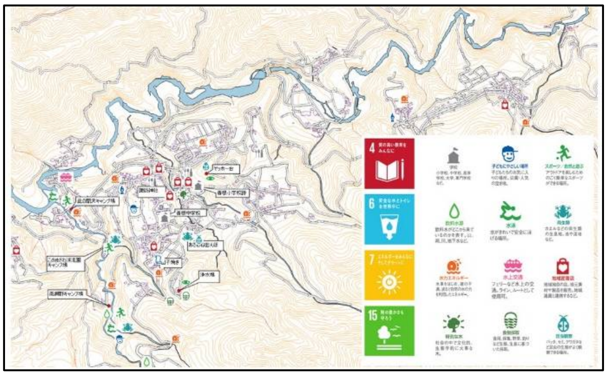

図 3　青根遊び仕事 SDGs グリーンマップ

5. 多様な主体の対話を促進する

座間市役所環境政策課は，市民環境ワークショップ「グリーンマップはじめました～未来の座間を私たちが創ります～」を開催した。事業の目的は，市民が対話をしながら座間の環境的な資源と課題を抽出・共有・把握するとともに，座間の未来の環境像を構想することで，2022 年度に策定予定の第 2 次座間市環境基本計画の基礎資料とすることであった。市からの依頼で，筆者と麻布大学の学生はグリーンマップを活用したワークショップを企画・実施した。

ワークショップは，2022 年 6 月 19 日に座

間市市民活動サポートセンターで実施した。手順は以下の通りであった。①学生が進行役となり参加者 12 名を 3 班に分けてアイスブレイクで打ち解けてもらう。②現在の座間の資源や課題を付箋紙に書き記し，グローバルアイコンを貼りながらマッピングする。付箋紙とアイコンは，資源はピンク，課題は青と色で区別する。③作成した現在のグリーンマップを発表する。④環境政策課から市の人口予測やカーボンニュートラル，気候変動や生物多様性，OECM などの環境基本計画に関するキーワードを説明する。⑤現在の座間のグリーンマップの上に，未来の座間に関する意見や思いを緑の付箋紙に書き記し，未来のアイコンを貼りながらマッピングする。資源を表すアイコンは変わらないが，色を緑色に変える。課題のアイコンは削除し，代わりに環境配慮住宅，自転車，水力エネルギー，生物保護地域などを「ありたい姿」のアイコンを赤色で追加した。座間の良いところは維持し，課題は市民と行政で解決されるからである。こうして「現在の座間」のレイヤーの上に「未来の座間」のレイヤーが重なるグリーンマップとなる。⑥関連する SDGs のアイコンを貼ってゆく。⑦それぞれの SDGs グリーンマップにタイトルをつける。⑧発表する。

写真 2　座間市の SDGs グリーンマップ

それぞれのグリーンマップには以下のようなタイトルがつけられた。

A 班「思わず歩きたくなる町！」

B 班「ゼロエミッションを実現する家庭とモビリティ！」

C 班「子どもに伝えたい事　残したい物　幸せとは　学びの機会　未来」

これらのタイトルは，座間の「ありたい姿」「将来ビジョン」である。

各班の付箋紙の数は以下の通りであった。

表１　付箋紙の数

	A 班	B 班	C 班	計
現在の座間	33	23	23	79
未来の座間	24	13	29	66
計	57	36	52	145

付箋紙の記述は，第 2 次座間市環境基本計画策定の基礎資料としても活用された。

6. 地域の現在・過去・未来をつなげる

2022 年 8 月 28 日に県立座間谷戸山公園で「大学生と一緒に座間谷戸山公園を散策しよう！」を麻布大学環境教育研究会主催（後援：座間市役所,公益財団法人神奈川県公園協会）を開催した。市民が大学生とともに発見した資源や課題を SDGs グリーンマップで共有し，未来のありたい姿を描くことで，環境保全意識を増進することが目的であった。麻布大学の学生 4 人と教職員 3 人，座間市役所職員 4 人，神奈川県公園協会職員 3 人が協働して，小学 2 年生から 70 代までの参加者 9 名に対してワークショップを実施した。

手順は以下の通りである。①プログラムのねらいと概要を伝える。②アイスブレイクで打ち解け，参加者を 2 班に分ける。③班ごとにコースを決めて公園を散策する。④発見した資源や課題をグローバルアイコンと付箋紙，写真でマッピングする。資源については青，課題については赤色のアイコンを使用する。写真はスマホで撮影し，インスタントカメラで印刷する。⑤ミニ講義で地理院地図[9]

の 1960 年代から 2019 年までの航空写真の時系列表示を見てもらい，公園および周辺環境の変化について気づいたことを話し合ってもらう。⑥これからの公園のためにできることを話し合ったことを付箋紙に書き記し，未来のグルーバルアイコンとともに貼る。未来のグローバルアイコンは緑色にする。⑦関連するSDGs のアイコンを貼る。⑧タイトルをつける。⑨発表する。

大学生の進行とマッピングの共同作業を通して，最大 60 歳もの年齢差があった参加者たちは打ち解けていった。散策では資源だけでなく，ナラ枯れやカエンタケなど課題の現場も体験できた。航空写真の変遷をみることで，樹木が巨木していること，公園周辺の田畑が減り，動植物の生息地が減少していることに気づくことができた。

それぞれの班は，「キャッチ＆リリースで自然と共存～不便だけど安らぐ自然を大切に～」と「未来につなげる谷戸山公園」というタイトルをつけた。これらのタイトルは，市民による公園の未来ビジョンである。

写真 3 座間谷戸山公園 SDGs グリーンマップ

7. ビジョンの共創とアジェンダの実践

町田市役所主催「芹ヶ谷公園　緑の物語をつくるワークショップ　～芹ヶ谷の緑で”○○したい”を実践しよう～」でも SDGs グリーンマップのワークショップを行った。

町田市立芹ヶ谷公園でも，樹木の巨木化やナラ枯れ，カエンタケなどの課題が生じていた。公園の安全のためには樹木を伐採する必要があるが，伐採に反対する住民もいる。そこで町田市役所は住民とのコミュニケーションを通して，一緒に公園の緑のあり方を考え実践するワークショップの企画・実施を筆者に依頼した。2022 年 8 月 18 日に市の職員だけで企画・実施した「第 1 回緑と生態系の物語を知る編」に続く 3 回分のワークショップを筆者が担当することとなった。

「第 2 回見つける・語る編」は 2022 年 10 月 29 日に，小学生 3 人を含む 8 名の参加者に対して，麻布大学の教員と学生 3 人，市職員 6 人で実施した。手順は，県立座間谷戸山公園と同じであった。

散策コースには，公園の一部で NPO 法人が管理する芹ヶ谷冒険遊び場（せりぼう）もあった。設置当初は，倒木や不法投棄のごみの撤去から始めて，現在まで遊び場として子どもと市民が利用しながら管理している。この市民と行政による共同管理（ガバナンス）の実例も参考にしながらマッピングをした。

昆虫学者になる夢を持つ子どもたちから「芹ヶ谷公園は他の公園よりも生き物が多い」との情報が提供された。そこから谷戸で湧水もある多様な生態系が芹ヶ谷公園にはあること，公園の生態系を維持しなければ虫を守れないことが班で共有された。子どもたちの班では「子どもたちがゆたかにくらせる公園」というタイトルになった。

別の班のタイトルは，「つかうひとがつくる　キャンプ・防災・スケボー」であった。タイトルには，以下の意見に基づいている。「町田市にはキャンプ場がない。公園でキャンプをしたい。」「楽しみだけでなく防災のような公共的な活動もしたい。」「かまどベンチなどの防災施設が芹ヶ谷公園にあるが未使用である。」「公園内で密かに若者がスケボーの練習場を設置したことがあった。市が支援して，彼ら自身で練習場を計画・設置・管理すれば，若者の居場所となるかもしれない。」

写真 4 芹ヶ谷公園 SDGs グリーンマップ

第２回で策定されたタイトル，すなわち共創されたビジョンは，2022 年 11 月 20 日の「第 3 回ちょっと実践・作戦会議してみる編」でアジェンダとして一部実践された。そこでは，参加者が公園の枯れ枝を燃料として集めて，かまどベンチで火を囲み，防災や公園の管理と利用の可能性について話し合い，さらなる「やってみたいこと」のアイデアと実現方法を構想した[10]。

8. おわりに

SDGs グリーンマップは，私たちと地域の地理情報とをつなげて，空間的・時間軸的に SDGs を自分事化することで，ビジョンの共創やアジェンダの実践に資することができる。それは，目的をもって活用すれば，作成後の発展性も期待できるツールである。

謝辞

ワークショップの手法を一緒に開発した麻布大学の学生たち、とくに三橋晴香と西山香瑠に感謝します。またワークショップの機会を提供してくれた青根の人々，座間市役所，公益財団法人神奈川県公園協会，町田市役所に感謝します。

引用文献・参考文献

梶山純・村山史世・本橋明彦（2009）「地域を考える学習プログラムーさがまちプレ・コンソーシアム大学でのグリーンマップを活用した実践－ 」 「住まい・まち学習」実践報告・論文集（10）93-98

津久井町文化財保護委員会編（2004）『平成 14・15 年度研究報告書 つくい町の水車』津久井町教育委員会

村山史世（2014）「ESD の実践と地域社会の変容」日本環境教育学会編『日本の環境教育第２集 環境教育と ESD』 90-96 東洋館出版社

村山史世・相場史寛（2018）「2030 アジェンダ･SDGs を自分事化するためのツールの開発」日本環境教育学会関東支部年報 （12） 33-36

村山史世・石井雅章・陣内雄次・高橋朝美・滝口直樹・長岡素彦・村松陸雄（2019）「2030 アジェンダ・SDGs を理解し、自分事化するためのワークショップの実践―6 つの事例と自分事化のフェーズ」武蔵野大学環境研究所紀要（8）47-65

村山史世・渡邉菜乃花（2020）「2030 アジェンダ・SDGs を自分事化するためのツールの開発 第２報 SDGs レンズ」 日本環境教育学会関東支部年報（14）53-56

[1] 村山・相場（2018），村山・石井・陣内・高橋・滝口・長岡・村松（2019），村山・渡邉（2020）参照。
[2] https://www.greenmap.org/
[3] https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/deed.ja
[4] 梶山・村山・本橋（2009）
[5] https://www.greenmap.org/stories/sdgs-icons-un-sustainable-development-goals-green-map-icons/201
[6] 村山史世（2014）
[7] 津久井町文化財保護委員会編（2004）
[8] 麻布大学地域環境政策研究室が制作した動画「SDGs グリーンマップ 足元から 私たちの世界を変革する（日本語版）」を参照。https://vimeo.com/658037929
[9] https://maps.gsi.go.jp/
[10]「第 4 回ハンズオンで学ぶ・過ごす編」は 2023 年 2 月 25 日に実施予定である。（2023 年 2 月 8 日脱稿）